

「まるでドーナツみたい」

市川
貴幸

登場人物

古田マモル (28) 気の優しい主夫

古田ミキ (28) 働き者の妻

万田今日子 (28) トラブルメーカー

万田修吾 (35) 働き者の夫

○神宮外苑#1

すがすがしい朝。

オリンピックに向けた工事が進む街並み。

○神宮外苑#2

神宮の森の木立に朝陽が射す。

朝のジョギングを楽しむランナーたちや、
犬散歩をする人たち。

○マンション・ダイニング

解放感のある広々としたキッチン。

古田マモル（28）が朝食の支度をして
いる。

小さなオムレツ、おからのサラダなど手
際良くオシャレな朝食を作る。

マモルは、少し地味だが清潔感のある服
を着て、キャンバス生地のエプロンをし
ている。

ダイニングテーブルに四人分の朝食を並
べ始める。

そこへ、ジョギングを終え、ひと汗かい

た万田修吾（35）が帰って来る。

マモル「おかえりなさい！」

修吾「あ：どうも」

マモル「ぐるつと？」

修吾「うん、外苑コース、三周かな」

マモル「三周も！着替え出しますね、シャワーどうぞ」

そこへマモルの妻、古田ミキ（28）が
パジャマのまま起きてくる。

ミキ「おはよー」

マモル・修吾「おはよう」

ミキ「早起きだなあ、二人とも」

修吾「さあ、この豪勢な朝食をいただきこう」

ミキ「待って、もう一人、起こさなきゃ」

マモル「……」

修吾「……」

ミキ「なんで黙るの？」

修吾「いやあ……」

マモル「眠ってるなら……」

ミキ「仲間はずれにしちゃうの？」

マモル「ハハハ、小学生じゃないんだから」

修吾「アイツ、小学生よりタチが悪いかも：

…」

○同・ゲストルーム

お客様用の寝室。

シングルベッドが二つあり、そのひとつで眠る万田今日子（28）。

今日子、陽ざしの明るさで目を覚ます。

マモルN「四人の男女が日曜日の朝をこんな風に迎える。理想的な気持ちのイイ朝に見えるかもしれない。だって、そう見るといいなと思って気取っているのだから」

○同・ダイニング

朝食の支度をするマモル。

ミキ、修吾に着替えのシャツやタオルを貸している。そんな朝の風景。

マモルN「僕らの家に彼ら夫婦が泊まること

になり一夜が明けた、というわけだ。一夜
と言つてもよく憶えていない」

○回想・神宮外苑（夜）

深夜の並木道。

一台のタクシーが来て、停まる。

タクシーからヨタヨタと降りるマモル、

ミキ、修吾、今日子。

いかにも披露宴帰りという感じの四人。

そして、ひどく酔っぱらっている。

マモルN「共通の友人の結婚式に出た僕らの

記憶はアルコール漬けになっていて、二次

会を抜け出してから一部始終ふやふやだ。

泊まっちゃえばいいじゃん、みたいな流れ

になったのだ、きっと」

マモルがモタモタしながらサイフを出し、

タクシー代を支払う。

マモルの尻を蹴っ飛ばそうとする今日子

と、それを止めている修吾。

ケラケラ笑っているミキ。

ミキの笑顔で、ストップモーション。

マモルN「この人が僕の奥さんのミキさん。
大学四年生の時に出会って三年の交際を
経て結婚した。今年で結婚三年目」

今日子がマモルの尻を蹴り上げる瞬間で、
ストップモーション。

マモルN「彼女は奥さんの大学時代の友人、
今日子さん。大学時代の友人というのは、
大抵そうだけど、大学時代だけの友人であ
る。で、昨日の結婚式で六年ぶりに再会し
た。僕は今日子さんとは学生時代に一、二
度しか会ったことがない……と、一応そう
いうことになっている。つまりウソをつい
ている。とにかく僕にとってなにより気ま
ずい人で」

暴れる今日子を止める修吾の苦笑の顔で、
ストップモーション。

マモルN「この人は今日子さんの旦那さん。
昨日初めて会った。イイ人そうで良かった」

去っていくタクシーを四人並んで手を振って見送る（悪ふざけ）。

とても楽しそうに手を振り続ける四人。

マモルN「こうして僕は、絶対に泊めてはいけない人をウチに泊めてしまった」

○マンション・ダイニング

マモルとミキが朝食の支度を終えた頃。

パジャマ姿の今日子がワインボトルを抱えて起きてくる。

今日子「これ（ボトル）抱いて寝てた（苦

笑）」

ミキ「おはよう！」

マモル「お、おはよう」

今日子「おはよー、オエ、食欲ないよねー」

マモル「そ、そう」

テーブルの上には豪華な朝食。

今日子「（朝食を見て）あらー」

マモル「もしかして、みんな食欲ない？」

ミキ「ハハハ…（マモルの肩を抱く）」

マモル「ハハハ……」

○タイトル『まるでドーナツみたい』

○マンション・洗面所

シャワーを終えた修吾が髪を拭いている。

そこへ今日子がやってくる。

目を合わせもしない今日子と修吾。

無言で、険悪な空気……。

修吾、そそくさと洗面所を出て行く。

×

×

×

顔をガシガシ洗っている今日子。

こっそりやってきたマモルが、今日子の

耳元でコソコソと話しかけている。

今日子、顔を洗い終わり。

今日子「ゴニョゴニョなに言ってるの？」

マモル「いや、だから」

今日子「そのエプロン、ほんと似合ってる」

マモル「マジメに聞いてよ」

今日子「わかってるっての」

マモル「いい？僕らが学生時代に恋人同士だったってこと……」

今日子「黙ってりゃいいんでしょう？」

マモル「そういうこと」

今日子「エッチばかりしてたこと、黙ってりゃいいんでしょう？ハハハ」

マモル「し、してないでしょう、そんなに」

今日子「あのさあ、昨日も私はマモルのその言い分を、あのへべレケの状態でも守ったんだから、まずは褒めてほしいよね」

マモル「だって言おうとしてたもん、面白がってたもん」

今日子「あっ！マモルの初体験って私だったっけ？」

マモル「ぜ、全部、忘れてよね」

今日子「100パーセント忘れてたわ」

マモル「と、とにかく全部水に流してよね、深い仲だったことは」

今日子「ハハハ、深い仲、だって（爆笑）」
マモル「なに笑ってんの」

今日子「めっちゃウケる話なのになあ、マモ

ルの初体験（爆笑）」

マモル「（無視して）じゃ頼むよ、黙ってて

ね」

今日子「どうしてそんなに隠してたいの？」

マモル、言いづらそうにモジモジして。

マモル「…生涯にミキさん一人としか付き

合ったことないって言っちゃってるんだ」

今日子「ホントは何人？」

マモル「今日子さんとミキさん、二人だけ」

今日子「げー、えらい！」

マモル「だから言わないで」

今日子「でも私、マモルが私の元カレだって

こと、学生ん時、ミキに言わなかったっ

け？」

マモル「口止め料、2万円、払ったよね」

今日子「え、いつ？全然憶えてないや」

マモル「土下座みたいなのもしたよね」

今日子「じゃ、また2万円、いや3万円」

マモル「…待ってて、持ってくる」

今日子「（笑って）バカ！ いらんないよ！」

そこへ、ミキが来る。

ミキ「どうしたあ？」

マモル「タ、タオル、貸してたんだよ！」

マモル、慌てて取り繕う。

今日子、タオルで顔をおさえてクスクス笑っている。

○同・ダイニング

マモル、ミキ、今日子、修吾が朝食を始めていて。

今日子、一人で白ワインを飲んでいる。

修吾「さ、もうソレ（白ワイン）やめな」

今日子「（無視して）それにしても、イイ所に住んでるよねえ、いくら？」

ミキ「ここマモルの実家なの」

今日子「そうだったけ？」

ミキ「ん？？？」

マモル「（慌てて）両親が田舎暮らし始めて」

ミキ「内装少しリフォームして、模様替え程

度のね」

今日子「ほうーう（部屋を見渡す）」

修吾「最近、親からマンション引き継ぐの、

結構増えてるみたいだよね」

ミキ「修吾さん、今、マンションとかも関わ
ってるんですか？」

修吾「今は神宮球場の建て替えがらみの仕事」

マモル「へえー！じゃあ忙しくて大変だ」

修吾「うん、久しぶりの連休」

マモル「立派だなあ、僕なんて職探しだもん」

ミキの顔、一瞬曇る。

マモル「ま、三十歳になる前の、ありがちな

理由で会社辞めちゃって」

今日子「夢だ！夢あんの？」

マモル「うん、恥ずかしいけど、あるんだよ

ね、将来、小さなお店、やりたいの」

ミキ「マモルは個人経営のノウハウないし、

だから、そういうお店で少し働けないかと

思っで、今探してるんだよね」

修吾「どんなお店やりたいの？」

マモル「書店です。小さなお店で、本だけじゃなく、色々なモノ、置いてるような」

ミキ「カフェみたいなのもいいな、ってね」

今日子「ミキも一緒にやるの？」

ミキ「まあ、軌道に乗れば、ね。でも私はしばらくは今の仕事したいの、ちいさな文具メーカーだけどさ、やりがいあるし」

今日子「へえ、そりゃいいわ。私なんて修吾と同じ会社じゃ気まずくって辞めちゃったからさ、ああ、（修吾を見て）また仕事したいなあ」

修吾「（今日子を無視して）マモルくん料理上手だから、カフェでもうまくいくかもね」

ミキ「あ、そうだ！ドーナツ作ってよ！マモルの作るドーナツ、すっごく美味しいんだ」

今日子「ドーナツ！？」

マモル「……」

今日子、マモルを見てニヤニヤ笑ってる。

何か、あるらしい……。

ミキ「今日はさ、一日ノンビリしようよ」

今日子「ねえ、もう一泊しちゃダメかなあ？」

ミキ「いいよ！うん、それイイ！」

マモルと修吾、顔がひきつる……。

今日子「いいでしょ？」

修吾「でも悪いよ……」

ミキ「ううん、私もそうして欲しいと思って

たの！（マモルに）ね！」

マモル「ね…（流れで答えた）」

今日子「やった！」

マモル・修吾「……」

○同・ゲストルーム

今日子と修吾がいて。

修吾「泊まれっこないだろ」

今日子「あきらめな」

修吾「俺は明日、仕事だろ」

今日子「一時間かそこら早く出れば、うち帰

って着替えて、間に合うでしょうよ」

修吾「俺は、夜になったら失礼するから」

今日子「どーぞ、ご勝手に」

修吾「それと、朝から白ワインなんて飲むなよ。みんな引いてたぞ」

今日子「味見程度でしょうよ」

修吾「なに気取ってたんだ」

今日子「いつものことじゃん」

修吾「いつも飲んでんのか？」

今日子「頭がスッキリするの、一日イイの」

修吾「生粋の日本人だったのに」

今日子「なんか文句ある？アンタだって、別に走らなくてもいいのに走っちゃってさ、わざわざ靴とかシャツとか借りちやって、

何やってんだか」

修吾「マモルくんと一緒に朝めし作れってのか？気まずいだろ、だから走るしかないだろ」

今日子「寝てればいいじゃん」

修吾「悪いだろ、朝めし作らせて、二人でグーグー寝てろってのか」

今日子「考えが固すぎるでしょ、やだやだ」

修吾「ああ、やめやめ、おわりおわり」

今日子「なんなの？」

修吾「みっともない、ああ、こんなところで夫婦ゲンカなんて」

今日子「そっちでしょ、ふっかけてきたの」

修吾「よそのウチのゲストルームでみっともない」

今日子「ここがゲストルーム？」

修吾「そういうこと言うな」

今日子「ちっぽけなゲストルーム、ハハハ」

修吾「いずれ子供部屋にしたいんだろ？」

今日子「……（冷たい顔になる）」

修吾「……」

今日子「最低」

修吾「……」

今日子「結局そのハナシか」

修吾「……」

今日子「うんざりする。こんな所に来てまで、

またほじくり返すの？ハハハ、それしか頭
にないの？」

○同・ダイニング

マモルとミキ、食器のあと片づけ。

ミキ「二人に帰ってほしかった？」

マモル「ううん、いいけどね（苦笑い）」

ミキ「やっぱ、イヤ？」

マモル「そうじゃないけども」

ミキ「あとさ、卑屈にならないでよね？職探

しとか言っちゃってさ」

マモル「そう見えた？卑屈に見えた？」

ミキ「ギリギリだったかな」

マモル「やっぱ、将来の夢のハナシなんて子

供っぽかったかな？」

ミキ「それがマモルのイイところだもん」

マモル「子供っぽかったんだ……」

ミキ「そういう、ウソつけない所、マモルの

正直な所、好きだし」

マモル「あ、ありがと……」

そこへ今日子、やって来る。

今日子「あのさー、ごめん、ちよつとき、な

んかラクな服とか貸してー」

ミキ「あ、うん、オツケー！あ、ちよつと待
つてて、選んでくるね」

ミキ、ダイニングを出て行く。

今日子、マモルに近づく。

今日子「ねえ、背中が痛くて」

マモル「（無視して）さ、お皿洗おっと」

今日子「ここ揉んで？（ふざけてベタつく）」

マモル「あっちいって」

今日子「マー君！」

マモル「そ、その呼び方やめて」

今日子「ハハハ」

マモル「帰ってくれない？お願いだから」

今日子「ドーナツかあ」

マモル「……（絶句）」

今日子「そのドーナツさ、私が作り方を教え
てあげたヤツだな？」

マモル「……頼むから帰って」

今日子「ドーナツ、よく二人で作ったよねえ」

マモル「今すぐ消えて」

今日子「やだね」

○同・ダイニング

マモル、ドーナツを作る準備をしている。

ミキと今日子、珈琲を淹れていて。

修吾、ひとり離れて窓辺のソファに座っている。

×

×

×

ミキ、修吾に珈琲を差し出す。

修吾「あ、ありがとう（珈琲を受け取る）」

ミキ「こういう日曜日っていいですよね」

修吾「うん。…たとえば、今日みたいな、

こんな日曜日にさ」

ミキ「ええ」

修吾「大事なことって、こういう、なんでも

もない瞬間に決めてしまうものなのかもね」

ミキ「…：…？」

修吾の顔に、冷たさが浮かぶ。

キッチンからマモルと今日子が。

マモル「ねえ、ドーナツ作れないや！」

今日子「材料がないんだって！」

ミキ「あらら」

マモル「ナツメグがないとダメなの、僕のド

ーナツはそうなの」

今日子「僕のドーナツって…」

○青空の下、道路

神宮周辺の道路。

ビューンっとマモルの車が走る。

○マモルの車（走行中）・車内

運転席にマモル、助手席に修吾。

後部座席にミキと今日子。

浮かない顔の、修吾とマモル。

浮かれた顔の、今日子とミキ。

今日子「ねえねえ、海行こう！」

ミキ「うみ！？」

修吾「思い付きでそういうこと言うなよ」

今日子「鴨川シーワールドでもいいや」

修吾「鴨シ―なんか行けるかよ、しかも俺の

実家の近くだろ、それ」

今日子「（無視して）海へ行こう！」

修吾「買い物に行くんだよ、ピスタチオ買いに行くんだろ、いい加減にしろよ」

今日子「ナツメグでしょ」

ミキ「（修吾に気を使い）海はムリかもね」

今日子「……実は面白い話があつてさあー」

マモル、焦って咳こむ。

マモル「う、海、行きましようか！」

修吾「マモルくん、無理しないでいいから」

マモル「へ、平気ですよ」

今日子「やったね！」

修吾「……（無然）」

ミキ「あ、じゃ、武蔵野園は？」

今日子「なにそれ」

ミキ「釣り堀なの」

今日子「すっごい楽しそう！」

修吾「……（ムスツとしている）」

ミキ「あそこなら近いし、海っぽいし」

マモル「海っぽいかなあー??」

×

×

×

マモル「ダブルデートみたいでいいですね」

修吾「俺はちよつとやめとくよ……ここで降り
ろしてくれるかな」

ミキ「え……」

今日子「……（カチンとくる）」

修吾「買い物思い出した、あとで合流しよう」
マモル「でも、そんな……」

○路上に停車するマモルの車

車を降りる修吾。

発進する車、それを見送る修吾。

○釣り堀「武蔵野園」

東京の隠れスポット、昔風情の佇まい。

○同・池

釣りをする今日子、マモル、ミキ。

今日子「サイテーでしょ、アイツ」

ミキ「そんなことない」

マモル「釣り堀が苦手なんだよ、きつと」

ミキ「そういう意味で降りたんじゃないと思
うけど」

今日子「二人して、あの人の肩ばっか持たな
いでよ」

マモル・ミキ「……」

今日子「しらけちゃうよね」

ピクリともしない今日子の釣竿。

シーンとした池の水面。

今日子「ニジマスにも、私は好かれない」

ミキ「好かれないの？……修吾さんに」

今日子「……別に」

マモル「愛してほしい、とか？」

今日子「愛とかは、なんか、違うよね、ハ」

ドル高すぎて。（笑って）修吾に好かれた

いとか、もうほぼ考えなくなってるし」

ミキ「うん、わかるけどね、それ」

マモル「え……」

今日子「釣り糸垂らしても何一つひっかか
らない、毎日そんな感じ……ハア、不倫と

かって、こういう気持ちから始まるのかも。
糸がビクンって波打てばいいの」

ミキ「不倫はダメ！」

ミキの釣竿がピクピク動いて。

竿をあげると魚が釣れた！

ミキ「わー！ー！」

今日子とマモルも大はしゃぎ。

×

×

×

ミキ、釣った魚を会計所に持って行く。

マモルと今日子は、釣れる気配がなく。

まだ池の淵にいて。

今日子「気をつけなよー。やっぱりキレイな

女はさ、お魚寄ってくるんだから」

マモル「こわいこと言わないで」

今日子「でもキミたちって、よく晴れた日曜

日のベランダにお揃いのパジャマが干して

ある、そんな感じだよね、ムカつくよね」

マモル「……ありがとう」

今日子「たぶん今、私、誰からも好かれてな

い」

と、淋しそうな表情を浮かべる。

マモル「性格を少し直せば……」

今日子「私とやり直そうか」

マモル「な、なに言ってるの」

今日子「昔みたいなの100%楽しいだけのセ

ックスはもうないのかな」

マモル「……（胸の奥を突かれた感じ）」

今日子「久々に、将来と関係ないセックスと

か恋愛とかしたいよね」

マモル「それ、少しわかるけど……」

今日子「マモルとこうしていると、マモルとそ

ういうことしたくなっちゃうな」

マモル「……」

○夜になる神宮外苑

ちようど、夕日が沈んでいく。

○マンション・ダイニング（夜）

ニジマスが豪快に調理されていく。

キッチンで料理をしているのは、修吾。

修吾、料理中にグーッとビールを飲む。

それを、今日子とミキとマモル、啞然と
見ている。

マモル「僕も手伝いますよ」

修吾「いいのいいの、俺やるの、座ってて」

今日子「ドーナツ作れなくなっちゃったじゃ
ん」

修吾「あ：（マモルに）ごめんね！」

マモル「全然いいんです！」

マモル、ミキ、今日子、ソファへ座る。

修吾、張り切って料理をやっていて。

マモル「どうしたのかな？様子がおかしいよ」

今日子「うむ」

ミキ「なんだか機嫌が悪くなっちゃってる」

今日子「……（怪しいと思う）」

×

×

×

夕食も終わり、お酒を飲んでいる四人。

かなり酔っている修吾。

修吾「つまり、土地の権利、その売買の事務
は、訴訟とか、請願とか許可申請とか、

仮決定の解除とか、まあとにかく様々な手
続きが一気に押し寄せてくる、そのパワー
を分散させて」

マモル「パワーバランスですね」

ミキ「テキト―なこと言わないで」

今日子「ちよつと飲み過ぎ！（修吾に水を渡
す）ほら、水」

修吾「んぐ（ゴクゴク水を飲み）だってね、
神宮の風景を変えるんだよ？すごいプレッ
シャーでしょ、でしょ、わかる？」

マモルとミキと今日子、トホホな感じ。

○同・ゲストルーム（夜）

今日子、酔った修吾を連れてきて。

修吾「うまかったろ、ニジマスの、スペイン
風だぞ、本来ならニシンを使うんだけどね」

今日子「やめてよ、みんな戸惑ってた」

修吾「お前だろ、戸惑ってたのは」

今日子「夜になったら帰るって言ったじゃん」

修吾「楽しい夕食だっただろ？」

修吾、ベッドの上にボタンと大の字に。

今日子「飲み過ぎだし」

修吾「俺、決めたんだ」

今日子「……」

修吾「決めちゃったんだ」

今日子「……：……やめてよ。こんなところで……」

今日子の表情、緊張が走る。

今日子「……言うの、やめてよ」

修吾「もう、言ってるようなもんじゃん、ハ

ハハ（自虐的に笑う）

今日子「……」

修吾「この日曜日が、俺らの最後の思い出な

んだ。そうだろ？」

今日子「……」

修吾「そんな気がしなかったか？」

今日子「……」

修吾「釣り堀、行きやあよかったなあ」

今日子「え……」

修吾「……行けばよかったなあ」

今日子「……：……」

修吾「もう眠いや」

今日子「……」

修吾「明日は月曜日だ。おやすみ」

○夜空

月と薄い雲、神宮の森。

○マンション・ダイニング（夜）

深夜の、静かなキッチン。

暗いダイニングに人影。

窓辺のソファに座っている今日子……。

パチツと灯りが点いて。

マモルが電気を点けた。

今日子「あ」

マモル「……お茶でも飲む？」

今日子「よくわかったね、今、すごく飲みた
かったの」

マモル「カタカタ音がした」

今日子「あーごめん、勝手に紅茶探したの、
でも悪いかなあって思ってやめて」

マモル「本当はこっち（ワイン）でしょ？」

今日子「バレてるね（笑う）」

マモル「バレバレ（笑う）」

今日子「実は、薬がないと眠れないの、安定

剤みたいなの、だけど」

マモル「へえ」

今日子「ねえ、マモル」

マモル「……」

今日子「あ、私の話、聞きたくなさそう。今、

そういう空気、ピッて出した」

マモル、何も言い返さず、ワインをグラ

スに注いで、今日子に渡す。

今日子「ありがとう」

マモル、自分のグラスにもワインを注ぎ。

マモル「カンパイはおかしいね」

今日子「ううん」

チンツと小さくカンパイする。

二人、ワインを飲む。

今日子「あのさ……マモルのところはまだ子

供つくんだね」

マモル「……まあね。今日子さん、今、それ、

緊張して聞いたでしよ？どうして？」

今日子「私ね、子供、欲しくないの」

マモル「……」

今日子「でも、仕事もしてないし、主婦らしいことだつてろくにしないで、一体、なにがしたいかわかんないの。……仕事も家事も忙しくて、ちゃんと、そうやって生きてれば、子供欲しいって思うんだよ、きつと。私みたいなね、生産性のない奴は子供ほしいなんて思えないんだよね」

マモル「今日子さん……」

今日子「しかも産んでもいないのに、この有り様だし、わかる？……生まれてもいない子供めぐつてケンカしてる。子供ができたら悲惨だよ、どうなるか。子供抱えてひとりで生きていくなんて、私、ムリでしょ、そんなに強い人間じゃないよ……」

マモル「……」

今日子「わたし……最悪でしょ。……………」

………何か言つてよ………

マモル「……………」

今日子「……………」

マモル、ワインを飲み干して。

マモル「ドーナツを作ろう！」

今日子「????」

フツと、笑ってしまう今日子。

今日子「ハハハ、それ最高」

マモル「でしょ！」

○同・キッチン（夜）

マモルと今日子、ドーナツを作り始める。

二人、肩が触れ合っていて。

①生地を練る（小麦粉などをこねる）。

今日子「作り方、忘れちゃったよ」

マモル「僕はきつと一生忘れない」

今日子「……………（少し照れ）」

×

×

×

②生地をめん棒で伸ばす。

マモル「今日子さん、あの頃、お菓子作りに凝ってたよね」

今日子「私の人生の中で、最大の謎だね」

マモル「また、作りなよ」

今日子「めんどっちいや」

×

×

×

③生地をドーナツの型で型抜きする。

マモル「ドーナツは新石器時代から作られてたんだって」

今日子「うそ!？」

マモル「みんな昔からドーナツを作ってたんだよ」

今日子「ハハハ、みんなって誰?」

マモル「えーと、人類かな? (笑う) きっとさ、ヒドイこといっぱいあったんだよね、人類はさ。でも、こうしてドーナツ作ってきたんだ。わかるよ、その気持ち。嫌なこと悲しいことも忘れられるんだ」

今日子、ドーナツの型を指でぐるぐるとなぞりながら。

今日子「マモルの人生は、かなりドーナツに
支えられてきたみたいね」

マモル「ついでに人類もね」

×

×

×

④型抜きした生地を油で揚げる。

今日子「この匂い……なつかし（微笑む）」

今日子、キッチンを離れて、窓辺のソフ

アに寝転がる。

マモル「寝ちやうの？もうすぐ出来るよ」

今日子「ねえ、キスしてくれないかな？」

マモル「……（手が止まる）」

今日子「とつても、してほしいんだけど」

マモル「……」

眠りそうな今日子。

ふと、今日子にキスをするマモル。

今日子、驚きつつ、キスを続ける。

やがて離れる二人。

今日子「ドーナツは頼んだ……」

マモル「……」

今日子、静かに眠りはじめる。

キッチンで、油の中に浮かぶドーナツが
パチパチと音をあげている。

○朝になる神宮外苑

平日の、朝の景色。

○マンション・ダイニング

完成したドーナツ（カラフルにデコレ
ションされて美味しそう）が30個、テ
ーブルにズラリと並ぶ、が……。

ミキと修吾、慌ただしくバタバタと出勤
の準備をしている（寝坊したらしい）。

マモル、ミキの支度を手伝ってて。

今日子はソファでダラつく。

今日子「会議？」

ミキ「会議っていうか、朝礼があつてさ」

マモル「家出るの早すぎない？昨日、なんに
も言っってなかったじゃん」

ミキ「すっかり忘れてたの、やばい遅刻っ」
マモル「ねえ、ドーナツ食べてきなよ」

ミキ「ごめん、ちょっと時間ホントない」

マモル「もつてく？」

ミキ「えーと、いや」

マモル「修吾さん、タクシーの中でドーナツ」

修吾「せっかくだけど、昨日飲み過ぎて」

マモル「そうでしたね……」

今日子「ねえ、背中がズキズキするの」

修吾「腰だろ？」

今日子「背中よ」

修吾「みんな朝忙しいんだよ、ほら早く、帰る支度して、うち帰らなきゃ」

今日子「背中がマジで痛いの」

ミキ「そんなところで寝るからあ」

今日子「病院行きたい、動けないの」

修吾「お前さ……」

ミキ「マモル、今日子を病院に連れて行って

あげたら？」

マモル「えっ、僕が？そんなあ」

今日子「保険証がない、修吾、取って来て」

修吾「くるったこと言うなって」

今日子「ちよっとくらい会社遅れたっていい

でしようよ（キレル）」

修吾「子供じみたことするなよ（マジギレ）」

ミキ「マモル！」

マモル「わ、わかったよ、僕が、修吾さんを

車で家に送って、で、保険証を預かって、

戻って来て、今日子さんを病院に連れて行

く。これでいい？」

ミキ・修吾・今日子「うん」

○マンション・玄関ロビー

小走りするミキ、後を追うマモル。

マモル「ねえ、どうしたの？」

ミキ「なにが？」

マモル「なんか怒ってる」

ミキ「別に」

マモル「会社行くの早すぎるじゃん、ドーナ

ツも食べてくれないじゃん、そんなの变じ

やん」

ミキ、止まって、真正面から言う。

ミキ「じゃ、ハッキリ言うけど！二人で深夜にドーナツなんか作っちゃって、なに？今日子の気を惹こうとでも思った？それに：二人ともなんか隠してない？ぜったい隠してる、100%隠してる、1000%隠してる、わかるわかる全然わかる、イライラする！じゃ、いつてきます！」

マモル「あああ……」

マンションを出て行くミキ。

修吾が来る。

修吾「お待たせー。ん？どうした？」

マモル「いいえ。急ぎましょ……」

○マモルの車（走行中）・車内

運転するマモル、助手席に修吾。

修吾、窓の外を眺めて。

街はそこここで、工事をしていて。

修吾「どうして人は完成された人生を求めるんだろう。誰も金メダルなんてくれないのに……」

マモル「金メダルかあ」

修吾「オリンピックより、こちらは毎日、必死に競争してるみたいじゃないか？」

マモル「僕は完全に敗者です（笑う）」

修吾「俺たち夫婦はマモル君たちみたいになれないなってね、昨日ね、思ったよね」

マモル「はやとちりですよ」

修吾「そうかな」

マモル「僕ら二人には、何か足りないんです。そんな風に思ってます」

修吾「子供？」

マモル「いいえ、もっと、なんていうか」

修吾「もっと？」

マモル「目に見えないものだと思うんです」

修吾「そっか。俺さ、今日子に、20代のうちに出産した方がいっていうようなことを、つい、そういうことを言ったんだよね。そういうデータは歴然と出てるでしょう。会社でもね、30代になって結婚する人多いし、そういう出産の話題になって。」

俺としては、彼女を思っただけのことと言ったんだけど。今日、そういう気、ないみたいで……。やっぱり、本音言うと、俺は子供ほしいんだよね。子供いないと、人生が完成しないっていうか」

マモル「わかりますよ、それ、その感じ。でも、えーと、そのー、僕の所はムリなんです、ほぼ、見込みないんです。なんていうか、子供、そういうことなんです」

修吾「そう……（ショックで）」

マモル「……」

修吾「すみません、ごめん、なんか」

マモル「（あえて明るく）いいえ、はぐらかそうと思っただけども、迷っちゃいました、で、今、言いました」

修吾「うん」

マモル「うーんと、僕の方が、つまり、体の問題でして。調べて、わかって、治療もして」

修吾「はい」

マモル「まだ、可能性、ゼロと決まったわけじゃないけど、治療はやめにしたんです」

修吾「うん」

マモル「やめたら、自然にできた人もいるって言うし」

修吾「うん」

マモル「でも、なんだろう、パタッと、未来が死んだ感じ、して」

修吾「未来が死んだ、か」

マモル「それで、僕は引きこもってて、ミキさんに支えられっぱなしで。僕、すごく動揺したんです」

修吾「ミキさんも、だよな？きつと」

マモル「そうですね、二人して動揺して」

修吾「うん」

マモル「ホント、未来って何が起こるかわからないですね。大人になってからの未来って、残酷なものばかりです」

修吾「きつと、それが、大人の未来なのかもしれないね」

○マンション・リビング

ソファにいる今日子。

思い詰めた表情を浮かべていて。

そこへ、マモルが帰宅する。

マモル「気分はどう？」

今日子「見てわかんない？」

マモル「大丈夫そうだね」

今日子「頼むから、今ケンカ売るのはやめて」

マモル、修吾から預かった保険証と鍵を

今日子に渡す。

マモル「はい、保険証、それと、鍵」

今日子「鍵？…ああ、ウチの鍵か」

マモル「夜は戸締りをしっかりしなっ」

今日子「は？いつもしてるけど」

マモル「修吾さん、少し家を離れるって。今

は少し距離をおこうって…」

今日子「…：：：そう。（鍵を見つめて）どっか

の車に傷つけてやりたい気分だな、ギ—

—って」

マモル「ここにずっと居座らないように、ち
ゃんと家に帰りなさいって」

今日子「ふうん」

マモル「修吾さんは会社の友達の家にしばら
く泊めてもらうって」

今日子「女かな？」

マモル「まさか」

今日子「まあ、いいや、どーでも」

今日子、マモルを見て。

今日子「昨日のつづき、しようか」

マモル「……（とても戸惑う）」

今日子「今すぐ服脱いでブラジャー外して、

マモルに抱きついていい？マモルのシャツ
も剥ぎ取ってパンツ脱がして、私のおっぱ
いにマモル沈めて、思いつきやっちゃん
たいとこなんだけど」

マモル「……（目が泳ぐ）」

今日子「離婚のゴタゴタの中が一番恋に落ち
やすいってこと、きみ知ってた？」

マモル「僕を巻き込まないでよ」

今日子「この地球上で必ずうまくいかない恋愛しかできない女がひとりくらいいたって良いと思わない？」

マモル「いない方が地球にやさしいと思う」
今日子「そういう女って、なかなか魅力的じゃない？」

今日子、服を一枚脱ぐ。
目が泳ぐマモル。

今日子「人生は突然、軌道を外れるの」
マモル「きどう？」

今日子「軌道」
今日子、指で丸く円を描く。

今日子「私たちは同じ所をぐるぐる回ってる。地球が太陽の周りをぐるぐる回ってるみたいに。でも一度くらい、そこから外れてみたいと思わない？」

マモル「……（答えが出ない）」
今日子、マモルに近づいて。
マモルにキスをする。強引にキスは続く、マモルはされるがままで、動かない。

今日子、キスをやめる。

少し傷つくも、取り繕って、ふざけて。

今日子「残念ながらできないや、イテテ、背

中が……私、実は……もうすぐ死ぬの」

マモル「え」

今日子「すごい病気なの、病院に連れてって」

マモル、戸惑った表情のまま。

○総合病院

大きな病院である。

○同・治療室

老人の患者さんばかりいる腰の治療室。

腰を温熱治療機器で温めている今日子。

マモルが付き添っている。

今日子「軽い神経痛と、やっぱりソファで寝

たのがいけなかったみたい」

マモル「（呆れて）よかったね。大きな病気

じゃなくて。じゃ、電話してくるね」

今日子「修吾に？」

マモル「そだよ」

今日子「私に重大な病気が見つかったって、

修吾に伝えてくれない？」

マモル「いつまでふざけるの？」

今日子「（真剣な雰囲気でもし、彼が飛んで来たなら、私、修吾ともう一度やり直して

みる」

マモル「……」

今日子「ね」

マモル「……（しぶしぶ頷く）」

○総合病院・ロビー

今日子は車イスに乗っていて。

それを押すマモル。

マモル「歩けるでしょ」

今日子「演出よ」

正面玄関の辺りにやって来て。

そこで修吾を待つことにする。

今日子「ちゃんと芝居したでしょうね」

マモル「したよ」

今日子「修吾、信じた？」

マモル「さあね、僕は熱演したけどね」

今日子「ハハハ、マジメだね、マモルは」

マモル「だって、来てほしいじゃん」

今日子「来ないと思う。私がウソ言ってるって、そういうの、ちゃんと見抜く人なの、

人のこと見透かすの得意なの」

マモル「だったら、来てくれるよ……」

今日子「……」

すると、正面玄関のガラスの自動ドアの
向こうに……。

タクシーが来て、停まるのが見える。

今日子とマモル、ハッと、目を見張る。

タクシーから降りる……老夫婦。

今日子・マモル「（違った）……」

○東京の街

を、タクシーが駆け抜ける。

○総合病院・ロビー

正面玄関を見張る今日子とマモル。

今日子「もういいよ」

マモル「……」

今日子「来ない来ない、来るわけないの」

マモル「わからないでしょ、まだ」

今日子「ねえ、修吾来なかったら、私と、

（少し真剣に）こっそりまた付き合って」

マモル「……」

正面玄関の外、タクシーが来て、停まる。

今日子とマモル、目を見張る。

タクシーから降りる……子連れのお婦人。

今日子「よし、私たち不倫しよう！」

マモル「信じられないことって起きるから」

今日子「起きないと思うけど」

マモル「だって、あんなに沢山のドーナツを

作ったのに、誰も食べてくれないなんて信

じられる？」

今日子「ハハハ、信じられない」

マモル「夜鍋したってのに……誰も食べない」

今日子「ハハハ、未来のことはわからないか」

マモル「そういうこと」

正面玄関、タクシーが来て、停まる。

タクシーのドアが開き。

タクシーを降りる……ミキ。

今日子「あ……」

マモル「あ！」

ミキ、正面玄関の外でウロウロしてて。

それを見たマモル、ダツと駆け出す。

あつ、という間に。

今日子、ひとり取り残される。

○同・正面玄関・外

ミキの元へ駆け寄るマモル。

マモル「ど、どうしたの？」

ミキ「マモルが心配で」

マモル「僕はどこも悪くないよ！」

ミキ「そうじゃなくて、今日子を病院に連れて行くってラインもらったけど、なんかとても心配で。その、二人きりで、今日子と

マモル、その、やっちゃってるのかな、とか思っつて、その」

マモル「ハハハ（冷や汗が出る）」

ミキ「マンションに誰もいなかったから、一応、こっちにも来てみたの、ハハハ（照れている）」

○同・ロビー

車イスに乗った今日子、正面玄関の外にいるマモルとミキを見ている。

マモル、笑って、ミキの頭を撫でている。それを見た今日子、二人に背を向け、遠ざかっていく。

慣れない手つきで車イスを動かして。

○同・正面玄関・外

マモルとミキ。

ミキ「今日子は？」

マモル「あ……」

○同・ロビー

マモルとミキがやって来る。

そこに、車イスだけがあつて……。

○同・病院内

マモルとミキ、今日子を探し歩いている。

○同・中庭

今日子、ぼんやりと立っている。

やがて、クスクス笑いだす。

今日子N「女の見え透いたウソにつきあつて、

ノコノコやってくるような男じゃないから、

私はあの人が好きなのだった」

○夕やけの空

日が暮れようとしている。

○総合病院の駐車場

マモルの車が駐車してある。

マモルとミキ、車に乗ろうとして。

ミキ「今日子、帰っちゃったのかな」

マモル「（心配そうに）……うん」

車のボディにギ——ッと傷が付いている。

マモル「げっ！！！」

突然、今日子が車の陰から現れる。

今日子「うわー、ヒドイね、それ（車体の傷）

イタズラかな？」

マモル「うわっ！」

ミキ「今日子っ！」

今日子「やあ！」

マモル「まさか、これ（車体の傷）……」

愕然とするマモル。

○マモルの車（走行中）・車内

運転するマモル、助手席にミキ。

後部座席に今日子が乗っている。

今日子「二人には感謝しなきゃ」

ミキ「腰、なんともなくてよかった」

今日子「背中だけだね、もう平気だよ。でも、夫婦生活とかさ、人生とかさ、最悪な気分だ

ったの。冴えない元カレとヤケクソで寝て
やろうとか、思っちゃった」

マモル「え」

ミキ「元カレ？なにそれ？」

今日子「いや、そんな気分だったからさ、二人
人がいてくれて救われた……ありがとね。

（笑って）ムダなセックスしないで済んだ」

マモル「う、うん」

ミキ「今夜もウチに泊まりなよ！」

今日子「え、いいの！？」

ミキ「（マモルに）ね？」

マモル「うん、もちろん」

マモルのスマホが鳴る。

ミキ「（スマホを見て）あ、修吾さんだ……」

気まずいマモルとミキ。

今日子「貸して」

今日子、ミキからスマホを受け取り、ハ
ンズフリーで通話を開始する。

修吾の声「もしもし……？もしもーし？マ
モルくん？」

今日子、マモルの肩を押す（喋れ、という意味）。

マモル、しぶしぶ、それに従う。

マモル「も、もしもし？」

修吾の声「へんな芝居は終わった？」

マモル「ええ、さつき」

修吾の声「どうせなんともないんだろ？」

マモル「ええ、正解です」

今日子、微笑んでいる。

修吾の声「今日子は家に帰った？」

マモル「えーと、そうですね……」

修吾の声「ほんと、迷惑かけちゃったね」

マモル「へトへトです」

修吾の声「あのさ、もう一つお願いがあった」

マモル「な、なんですか？」

今日子、少し緊張する……。

マモルとミキも、緊張……。

修吾の声「……ちよっと、しばらく泊めてくれない？」

マモル「うちにですか！？」

修吾の声「俺、ホントのこと言って、友達少

ないんだよね」

マモル「ど、どうぞ泊まってください」

修吾の声「今夜、お詫びに夕飯ごちそうする」

マモル「ごちそうさまです」

修吾の声「店、指定して、21時には行ける」

マモル「じゃあ、お店決めたら連絡します」

修吾の声「オーケー」

電話、切れる。

今日子、ミキ、マモル、大笑い。

今日子「ハハハ、あの人も行くところなのね」

マモル「とびきりの夜になりそうだ……」

ミキ「ふりだしに戻る、だね」

○神宮外苑（深夜）

美しい夜の並木道。

一台のタクシーが来て、停まる。

タクシーから、ヨタヨタとマモルとミキ、

修吾、今日子が降りてくる。

みんな、ひどく酔っぱらっている。

マモルN「時計がまわるごとに、何かがすり減っていくけれど、相変わらず僕らは、同じような所をぐるぐる回っているだけかもしれない。この街は、またオリンピックをやろうとしている。そして僕らは、まるでドーナツのように丸い人生をぐるぐる回って生きていくのだ。まあ、懲りずに生きていくのだ」

去っていくタクシーに。

四人が並んで、笑って手を振る。

神宮の街は、またオリンピックをやるうと準備している。

○ドーナツの映像

マモルが作ったドーナツの数々。

甘くておいしそうなドーナツ。

そこに、エンドロール。

おわり